

〔連載〕『凛々たる人生』

— 志を貫いた先人の姿 —

〔第八回〕日本列島を周回する航路を開拓した

河村 瑞賢 かわむら ずいけん

東京大学名誉教授 月尾嘉男

幕府が命令した航路開拓

最上川は山形県内を流下する日本九位の流域面積をもつ大河であり、流域の庄内平野は古代からコメの一大産地で、江戸や大坂など大消費地へ輸送されてきました。その輸送経

路は河口の酒田から日本海側を帆船で敦賀まで輸送し、そこで陸揚げして山道を荷車などで琵琶湖北岸の海津^{かづつ}まで運搬、さらに帆船に積替えて湖上を大津へ輸送、再度、陸路か淀川の水路を利用して大坂へ輸送するという面倒かつ時間のかかる方法でした。

一六四二（寛永一九）年に大雨、洪水、旱魃、

虫害などが重複して寛永の飢饉が発生したとき、幕府は庄内地方から江戸にコメを輸送しようとなりましたが、前述の経路では時間も費用もかかって十分なコメを輸送できませんでした。そこで幕府はある人物に新規の輸送経路を開拓することを命令します。その命令を見事に実現し、日本海側と太平洋側を帆船で往來する西回り航路と東回り航路を開拓した人物・河村瑞賢を紹介します。

次々と商才を発揮

河村瑞賢は一六一八（元和四）年に伊勢国東宮村^{とうぐさむら}に誕生し、一三歳になったときに江戸へ移動します。それだけでも野心のある若者であったことが想像できますが、商才のある性格でもあったことを証明する逸話が伝承されています。江戸では荷物を運搬する車力という仕事に従事していましたが、お盆の時期に品川の海岸付近を通行していると、精霊^{しんりょう}送りの野菜や果物が海岸や川岸に散乱していることを発見しました。

普通感覚であれば、漠然と季節の行事の風情を実感するだけですが、瑞賢はそれらを集めて漬物にし、地元で販売して大儲けしました。この才覚を発揮し、江戸幕府から故郷の桑名藩が下命された九十九里平野の北部



河村瑞賢（1618-99）

にある樁海つばきうみの干拓事業、その水抜きのために掘削された新川の開削事業を受注し、それらの工事に必要な材木の販売にも進出していきます。これらの仕事を契機に幕府の公共事業



図1 明暦の大火

と密接に係るようになりまし

た。さらに莫大な利益をもたらず商売の機会が到来しました。一六五七(明暦三)年に江戸で明暦の大火が発生しま

す(図1)。これは江戸城下の大半を焼滅させただけではなく、死者一〇万人とも推定される被害をもたらし、明暦の大火(一七二二)、文化の大火(一八〇六)とともに江戸三大大火とされます。さらに古代ローマの大火(六四)、近世ロンドンの大火(一六六六)とともに世界三大大火ともされる災害でした。

ところが材木の商売をしていた抜目のない瑞賢は大火の直後に木曾福島に出掛け、木材を大量に買占め、それを材料として江戸の復興工事を数多く受注し莫大な利益を獲得しました。買占めに掛けたときには二枚の小判に小穴を開けて紐を通し、チリンチリンと音のする玩具を用意して地元の子供に提供しました。大人たちは小判を玩具にするくらいだから余程の金持ちに間違いないと判断し、木材の購入に協力したという伝説があります。

これは誇張された内容かもしれませんが、このような機転のきく才覚によって江戸の復興事業に活躍した結果、幕府、とりわけ老中の相模国小田原藩主の稲葉正則と密接な関係構築し、幕府の公共事業だけではなく諸藩の仕事も次々と請負い発展していきます。その才覚を見込んで幕府から一六七〇(寛文一〇)年に下命されたのが、東北地方のコメをはじめとする産品を江戸や大坂まで海上輸送する航路の開拓でした。

東回りと西回りの航路開拓

まず翌年の一六七一(寛文一一)年に陸奥藩の産米を江戸へ輸送する東回り航路の開拓から開始します。この航路は江戸時代の初期から利用されており、一六一〇年代から二〇年代にかけて盛岡藩、仙台藩、米沢藩などが

太平洋岸の各港から江戸へコメを輸送していましたが、犬吠埼沖が強風で有名な難所のため、その手前の銚子で積荷を川船に積替えて利根川を利用して江戸へ輸送する経路が使用されてきました。

そこで瑞賢は東北各藩の産米を河川経由で石巻周辺に集荷し、伊達政宗が荒浜海岸と並行して掘削した貞山運河ていざんを利用して阿武隈川河口まで輸送します。そこから犬吠埼沖の強風の難所と房総半島の先端の野島崎沖の難所は海岸に接近せずに沖合を通過し、さらに江戸湾口も通過して一気に伊豆半島の下田に到着するようにします。そこで待機して風向が江戸の方向の西風になる機会を利用して江戸に到着する航路を開拓したのです。

この成功の翌年には庄内平野の産米の輸送を命令されます。そこで秋田、山形、庄内にある天領のコメ三九〇〇石を酒田に集積、多

数の帆船の集団で出発しますが、事前に周到な準備をします。当時は途中の港湾に入港すると各藩が税金を徴収するため、強風でも入港せず強引に航海して遭難することが多発していました。そこで瑞賢は幕府に入港の税金の廃止を依頼するとともに、監督する役人の常駐も依頼するなどの準備をしました。

さらに事前に部下を各地に派遣し、各港の状況、潮汐の状態を調査させ、船舶も入念に選定しました。そして五月に出羽の酒田から出航し、佐渡の小木、能登半島の福浦、但馬の柴山、石見の温泉津、長門の下関を経由して瀬戸内海に進入し、大坂に到着します。ここからは江戸を目指し、紀伊半島の先端の大島、伊勢の方座、志摩の畔乗、伊豆の下田などを經由、途中の難所には烽火も用意して、七月に無事に江戸に到着しました(図2)。

これが輸送革命であったことを証明する数

合は一八石でした。輸送距離は前者の三倍以上になりますが、輸送費用は四割でしかありませんから、輸送革命でした。

大坂平野の河川改修に成功

さらに瑞賢が活躍したのが淀川の治水工事で、七〇〇年から六〇〇〇年前には世界全体で気温が二度程度上昇し、日本列島周辺でも海面が数メートル上昇する縄文海進が発生していました。その影響で大坂平野も海面以下になり、上町台地といわれる半島のみが海上にあり、その東側は河内湾と名付けられる海面という状態でした。しかし、二〇〇〇年前の弥生時代になると海面が後退して沖積平野が登場します。

その河内平野には多数の河川が網目のように形成され、頻繁に洪水が発生する状態でした。



図2 東回り航路と西回り航路

字があります。西回り航路が実現する以前に海上輸送で富山から敦賀まで一〇〇石のコメを輸送する費用は一五石、さらに敦賀から陸路で山越えをして湖上を大津まで運搬すると二六石であったとされています。一方、西回り航路で海上を敦賀から大坂まで輸送した場

た。この広大な平地を安定した状態にしようと工事に着手したのが豊臣秀吉でした。秀吉は一五九四(文禄三)年に伏見城を構築するときに宇治川の川筋を変更するとともに、淀川の左岸に二七キロメートルにもなる文禄堤を構築し、河内平野への氾濫を防止するとともに淀川を大坂と京都を連絡する舟運が可能になる水路に変更しました。

それでも淀川下流には大量の土砂が蓄積し氾濫を防止できません。そこで江戸幕府は一六八三(天和三)年に美濃青野藩主稲葉正休に調査を命令します。正休は事業に精通している瑞賢を同伴して淀川水系の源流から河口までを調査し、淀川の治水計画を策定、費用を四万両と見積もり幕府に提案します。しかし老中堀田正俊が瑞賢に確認すると、半額の二万両で可能との返答でした。そのため正休は役目を罷免されてしまいます。

そのような経緯で工事を一任された瑞賢は一六八四（貞享元）年一月に大坂に到着して二月から工事を開始します。その基本は河口部分が河川からの土砂で湿地になって水田の適地になっているため、新田が開発されて川水が大坂湾内に流出しないことだと判断します。そこで湿地に新川（安治川）を掘削して水流を改善する工事を開始しますが、八月になって瑞賢は江戸に召喚され、工事が一旦中止になってしまいます。

それは瑞賢の工事の問題ではなく、江戸城内で正休が老中堀田正俊を刺殺するという事件が発生したからです。正休も即座に老中の阿部正武や戸田忠昌に刺殺され、一万二〇〇〇石の美濃青野藩は改易となります。原因は淀川回収事業から役目御免になった遺恨と推察されています。一七年後に発生する播磨赤穂藩主の浅野長矩（ながのり内匠頭）たくのみかみが高家旗本の吉



図3 堂島蔵屋敷

は大坂の堂島に一旦集積され、ここで取引されてから瑞賢が開拓した航路を利用して再度全国に流通してきました。その結果、江戸時代の堂島は「天下の台所」と

良義央（よしのへ上野介）を江戸城内で襲撃した有名な事件の前触れのような事件でした。

工事は一年以上中断しますが、一六八五（貞享二）年一二月に再開され、二年が経過した八七年に完了しました。この工事によって大坂平野の氾濫が減少しただけではなく、淀川の河道が掘削されて舟運が可能になり、現在の大阪の中心となっている堂島一帯の中洲も開発されました。その堂島と対岸の岸辺には日本の各藩の数百にもなる蔵屋敷が建造され、コメだけではなく各藩の産物を全国に流通させる日本の拠点となりました（図3）。

江戸での静謐な晩年

明治時代以後、鉄道が全国に敷設されるまで物資を大量に輸送する手段は水運しかなかったため、全国各藩のコメを代表とする産品

名付けられるほど繁栄しました。現在でも大阪が日本第二の都市として発展しているのは瑞賢の恩恵と表現しても過言ではありません。この天下の台所の恩恵により長者になった人物としては江戸へ木材やミカンを輸送した紀伊国屋文左衛門と木材を輸送した奈良屋茂左衛門が有名で、二人とも豪遊したことも有名です。瑞賢は航路の開発により幕府から三〇〇〇両を賜与されたといわれますが、前述の二人のような豪遊の噂はなく、晩年は江戸で茶道や俳諧などを趣味とし、同郷の松尾芭蕉とも交流があったという風雅な生活を、八二歳で逝去しています。

つぎお よしお

一九四二年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て東京大学名誉教授。専門は通信政策、仮想現実、人工知能趣味はキャックとクロスカントリースキー。

著書は『縮小文明の展望』『先住民族の叡智』『転換日本』『清々しき人々』『凛々たる人生』『爽快なる人生』など多数。